



写真_2 何でも捨てない。断捨離の逆をいく小田豊司さん(写真右)。その隠れ家的倉庫は、今や宝箱。「吉和の昔を多くの人に知ってもらいと参加しました。わたし自信、たくさんの人とお話できて楽しかったです」と小田さん。大野地域から訪れた河原佑美さんは「広報紙を見て、楽しそうだと思ってきました。思ったとおり、普段行けないところに行けたり、出展者の方がやさしくお話ししてくれたりしたので楽しかったです」と話してくれた。



写真_4 築120年の専立寺。吉和の深山から切り出された逸材で建築された総ケヤキの本堂や、金箔の龍の欄間は圧巻。「住んでいる地域以外のお寺にはなかなか行く機会がないと、皆さんに喜んでいただきました」と、住職の能島美緒さん。写教体験も人気だったとのこと。



写真_1 吉和の風景などの写真を自宅の縁側に展示した光井英水さん(写真右)。写真歴は50年だそうです。「絶え間なく人が訪れてくれたので忙しかつたのですが、吉和のことを知ってもらえるのはとてもうれしいことです。こういったイベントがあれば、また参加したいと思っています」と話してくれた。

願いは、このイベントを通じて、多くのつながりができること——

写真_3 二匹の看板犬がお出迎え。犬と触れ合える癒しの時間を提供した佐藤さん一家。「イベント中は途切れることなく訪れていただき、楽しい時間を過ごせました」と佐藤麻友さん。犬を連れて来る人も多かったとか。「犬の話になると会話が途切れませんね」と話してくれた。



「そば打ちには、田舎体験の元祖です」と語る吉岡利賀夫さん(写真右)。打ったそばは、すぐにゆでられ、その場で食べられる。自分で打ったそばはおいしくないはずがありません。「とてもいい体験ができました」と参加者の足澤克哉さん(写真左)

見て、歩いて、話して感じる吉和の原風景

吉和おさんぽギャラリー

10月6日、7日の両日、吉和全域で、自宅を開放し、趣味の絵や工芸品の展示会場として開放する「吉和おさんぽギャラリー」が行われた。

市内外から訪れた約2,000人の参加者は、秋晴れのもと、吉和の魅力を存分に味わった。

廿日市市の吉和地域で10月6日、7日、住民の自宅を趣味の絵や工芸品の展示会場として開放する「吉和おさんぽギャラリー」が初めて開催された。

「たくさんの方に、吉和の良さを知ってもらいたい」とそんな思いから生まれた「自宅開放型」の展示会。観光客を呼び込み、住民の生きがいづくりにつながるよう住民たちでつくる実行委員会が企画した。手作りの雑貨、採れたての野菜、縁側からの風景、自然と暮らす人々。吉和の魅力が民家や飲食店など、28カ所が会場となった。

参加者は、吉和支所前に設置された本部でマップを受け取り、それぞれ目的の会場へと向かう。キヤッチフレーズは、「見て、歩いて、話して感じる吉和の原風景」。その言葉どおり、広い吉和地域に点在する会場を参加

者はマップを見ながら歩いて回る。目印は、「背番号が描かれた赤いTシャツ」。出迎える出展者との会話を楽しむのもこのイベントの醍醐味だ。

「想像以上の参加者に行き来はみんなびっくりしています。どこかへのついでに寄っていただいたのではなく、このイベントを見に吉和に来ていたのだ」と実行委員長の吉岡真理さん。

本部で集計したアンケートには「いい企画でした。このようなイベントをまた企画して欲しい」、「出展者の方が、心からおもてなししてくれるのがうれしかった」、「普段は見ることができないものを見ることができてよかった」などの意見が寄せられた。

「アンケートの意見からも、手ごたえは十分感じました。何より、このような地域全体で行うイベントができたのも、地域の方がこのイベントに賛同し、協力してくれたおかげです。今回の経験を生かし、第二弾、第三弾の『おさんぽギャラリー』を発展させていきたいです。また、このイベントがきっかけとなり、今後いろいろな動きや交流につながればと考えています」と吉岡さんは話してくれた。

参加者に聞きました —Interview—



畑河内 真さん、理子さん、穂花ちゃん、菜々花ちゃん

どの出展者も必ず話しかけてくださり、吉和の自然や風景だけでなく、そこに住んでいる方々の生活の匂いを感じることができました。広い吉和地域が一体となって、すごい企画だと思います。本当に来てよかったです。



足澤 克哉さん、あずさん、弓奈ちゃん

プライベートで来ても普段は見ることができないようなところまで見せていただき、楽しかったです。地域の方と触れ合えるのがいいですね。親しく話をしてくれて、本当に近所のおじいちゃん、おばあちゃんと話しているようでした。